

アジア太平洋平和研究学会（APPRA）研究大会（11月12-14日）に参加して

浅川 和也（東海学園大学）

台湾そして立命館大学でひらかれたのに引き続いての参加であった。バンコクは20年ぶりとなる。空港から市内に鉄道がつながり、地下鉄や電車に接続している。かつては市内の移動もタクシーやバスだったので、隔世の感がある。もっとも先月末からのデモで道路が封鎖されているのではという懸念があるなか、特別行事と夕食会がおこなわれたタマサート大学へはマイクロバスで行ったが、けっこうな渋滞であった。

わたくしの最初の海外渡航はタイであった。1980年当時、カンボジア難民をタイが受け入れており、国境付近のキャンプに訪問した。仏教青年会（YMBA）の活動であった。以降、若い頃、何度か訪れたが、久しぶりのバンコクであった。

これまでの研究大会は大学を会場に宿泊は別のところという形であったが、大きなホテルの会議室での開催で、宿泊とも同じ場所での会議はきわめて快適であった。チェックインをすましてフェイブックをあけると片岡さんが到着との投稿があり、さっそく夕食にでかけた。

土地柄、東南アジア諸国からの参加者が多かった。メインテーマはこの地域での絶えることのない紛争に関してであった。世界各地の抵抗運動の事例を詳細に検討してみると、暴力的抵抗よりも非暴力的抵抗の方が圧倒的に成功してきたという基調講演があった。

発表は例えば90分に3つから4つの発表が生まれ、質疑や討論をそれぞれするのではなく、すべての発表を終えてから質疑をするという進行であった。司会者が発表者が揃っているかその場で確認するということもあり、欠席者もままあり、発表時間も適宜、まちまちであった。

わたくしの関心は教育であるが、教育に焦点をあてたものも多くあった。インドの Garden of Peace School (Manivannan) やフィリピンの San Ishidro Elementary School (Rosan)、北星学園大学の平和学の展開（片岡）、フィリピンへのスタディツアー（横山）、平和資料館「ヌチドゥタカラの家」（山根）、宮崎駿のアニメ（秋元）についてなどの発表があった。日本の平和教育があまり海外に知られていないことから、わたしは自分の報告の中で、昨年の IPE（平和教育研究集会）以降、広島や京都などで積極的に研究会がつづけられていること、来年はESD（持続可能な開発のための教育）の10年の最終年を迎えること、平和教育もESDの重要な分野であるが、位置づけはなされていないこと等を指摘した。

プログラムでは、トルコや中国、タイでの非暴力抵抗運動、南タイやマレーシア、フィリピン、インドネシア、インドでの民族問題、国家による弾圧、パキスタンでの無人機攻撃、紛争後の和解に関する発表等が散見される。タイでの開催ということもあり、宗教と平和に関わる分科会や特別に宗教に関する対話フォーラムも開かれた。また、平和と観光、平和と音楽という分科会もあり、それらに関して出版もなされたとのことであった。